

## 今年度調査成果の概要

### しもわり 下割遺跡 (上越市大字米岡字下割 1205 ほか)

4月から始まった下割遺跡の発掘調査は10月で終了しました。その結果、一辺50～60mの堀に囲まれた13世紀後半から14世紀ころの屋敷跡であることがわかりました。

堀の内側からは掘立柱建物跡が10棟以上、井戸跡が24基検出されました。掘立柱建物跡は1.5m×3mほどの小さなものから、6m×8mほどの大きなものがあります。写真の掘立柱建物跡は4.2m×7.8mの大きさで下割遺跡の中でも大きな方です。また掘立柱建物跡は狭い範囲に密集し、重複しており、何回か建て替えられたことがわかります。

堀の外側では道状遺構が確認されました(写真)。道は幅が約6m、長さが約40mあり、人などが通行する路面部分とその両側の側溝から構成されます。このほか堀の外側では溝や掘立柱建物跡が検出されました。このことから周辺にいくつかの屋敷が集まっていることが予想されます。そして、これらの屋敷は道で結ばれ、人や物が行き来する中世農村の景観が思い浮かべられます。

(山崎忠良)



道状遺構



検出された掘立柱建物跡

## 浦廻遺跡 (白根市大字戸頭字浦廻 4392 ほか)

浦廻遺跡は10月4日で現地調査を終了し、現在、報告書作成にむけて整理作業中です。これまでの調査、整理作業の結果で分かったことをお知らせいたします。

遺跡は、越後平野中央部の沖積地に位置します。現在の地表である水田面から、約3m掘り下げた標高-1.5m付近で見つかりました。そのために地下水位が高く、発掘現場では周囲に巡らせた暗渠の中に、いつも水が流れていました。おかげで、木製品は水にパックされ空気から遮断されていたために、腐らず良好な状態で保存されていたようです。このような理由で、浦廻遺跡ではたくさんの木製品が見つかりました。お墓に立てる卒塔婆<sup>そとば</sup>や魔除けの呪符等の木簡が、110点も出土しました。また、漆器の椀や盤、下駄、扇、杓子、刀形、木製行火<sup>あんか</sup>と思われる箱、竹とんぼの羽根等、多種多様な木製品が出土しました。下駄の歯を転用した火鑽臼<sup>ひきりうす</sup>も見つかり、当時の人々が木を大切に使用していた生活ぶりを伺うことができます。土器は、柄杓の蓋に使われた土師器が1点のみ出土しました。その他、人頭骨2点をはじめ、人間や犬の骨がたくさん見つかりました。

遺構は、直径8m、深さ1m程の性格不明の大型土坑が3基、畝状遺構が2区画、人の足跡が多数検出されました。畝状遺構は周辺は砂地で、畝を2回作り直したことが分かっています。今のところ、砂地の畑であろうと考えていますが、花粉分析等の自然科学分析の結果を待って判断する予定です。

遺跡の年代は、出土した遺物から鎌倉時代後期(13世紀後半～14世紀)と考えられます。今回の発掘調査では、墓地としてははっきりとした遺構は見つかりませんでした。しかし、骨や卒塔婆がたくさん見つかることから、当遺跡は、中世の葬儀や埋葬に関連した場所であろうと考えています。(本間克成)



大型土坑の発掘調査風景



畝状遺構



扇出土状況



巴紋の絵入り漆椀

## 遺跡を見つける ～確認調査班のしごと～

遺跡の調査を行っているとき、市民の方から「なぜここに遺跡があるとわかるのですか?」「人々が住んでいたという言い伝えや記録(絵図・古文書)があるのですか?」などの質問をいただくことがあります。もちろん、言い伝え・記録でわかる場合もありますが、大半の場合は、そういったものが残っていないか、文字が使われようになる以前の遺跡がほとんどです。では、どのようにして遺跡は見つけられるのでしょうか?ここでは、確認調査班の仕事の紹介と、どのようにして遺跡が見つけられるかについてお話しします。

現在、当事業団の調査は、道路や鉄道などの建設工事等に先立って行われているものがほとんどです。遺跡調査の第一段階は、その工事予定地内の「分布調査」を行います。この調査では予定地内の地形の状況とともに、耕作等により地中から持ち上げられた土器や石器などの遺物が落ちていないかどうか、地表面をよく観察しながら予定地全線を歩いて確認します。そして、地形的に見て遺跡の存在する可能性の高い箇所や遺物を採取できる箇所などを絞り込みます。

次に、第二段階として、分布調査で絞り込まれた箇所について「試掘調査」を行います。試掘調査では、分布調査で遺跡の存在する可能性が考えられた範囲について、全面的に掘削するのではなく、試し掘りの小さな調査坑(トレンチ)を一定の割合で点々と掘削し、土層の堆積状況や、遺物の有無について確認します。掘削は、通常、重機(バックホー)で行いますが、旧石器時代の遺跡のように微細な遺物が出土する場合や遺物が大量に見つかった場合などは人力で行うこともあります。いずれの場合でも土の色・性質の違いに注意しながら慎重に掘り下げていきます。そして、遺物が発見された場合には、どの地層(深さ)からいつ頃(時代)の遺物が出土し、住居跡や穴・溝などの痕跡(遺構)が存在するかどうかや、どれ位の範囲に遺跡が広がるかなど、遺跡の内容・時期などについて手がかりとなるデータを集め、記録します。

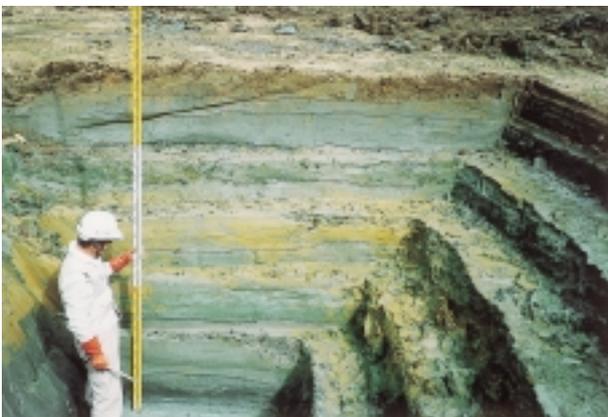
こうした試掘調査で得られたデータを基にして、はじめて遺跡全面を掘削する本格的な発掘調査が行われます。試掘調査での地道な作業の積み重ねが、発掘調査での大発見へとつながっているのです。(尾崎高宏)



分布調査の様子



試掘調査風景



試掘溝の土層の様子



遺構を確認した様子

## 第10回遺跡発掘調査報告会のご案内

今年度に事業団が実施した発掘調査成果をいち早く県民の方々に発表する報告会が、3月に新潟市の新潟ユニゾンプラザで開催されます。

昨年度は事業団設立10周年記念ということで、報告会と併せて青田遺跡公開シンポジウムを実施し、2,000名を超える方々にお集まりいただきました。今年度は従来の形に戻りますが、今年調査を行った5遺跡について報告を行う予定です。また、報告と併せて5つの遺跡から出土した遺物の展示も行いますので、是非、この機会にご覧ください。

### 【第10回遺跡発掘調査報告会】

主催：(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

新潟県教育委員会

日時：2003年3月2日(日) 10:30開場

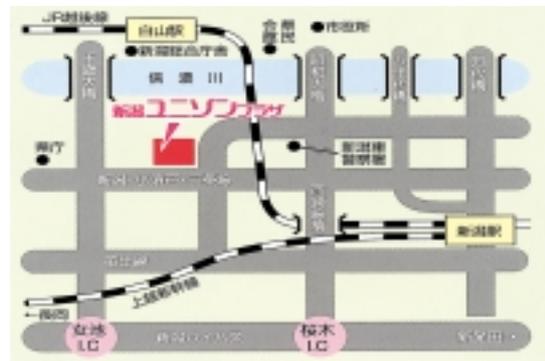
報告遺跡： 浦廻遺跡(白根市)  
 下沖北遺跡(柏崎市)  
 下割遺跡(上越市)  
 仲田遺跡(中頸城郡板倉町)  
 道端遺跡(岩船郡荒川町)

会場：新潟ユニゾンプラザ

座席数 448席・駐車場収容台数 240台  
 電話 025 - 281 - 5511

### 【会場への経路】

会場へは新潟県庁を目印にお出でください。県庁前の県道新潟・小須戸・三条線を新潟駅方面に向かって約1km程行った地点に会場があります。バスは新潟駅万代口から水島町経由「県庁」または「西部営業所」行きに乗り、「上所島」停留所下車、徒歩1分です。高速バスは、「県庁前」停留所下車してください。また、自家用車の場合は、新潟バイパスの桜木I.Cか女池I.Cで降りて、約10分程の距離になります。



### 【お問い合わせ先】

報告会の詳細につきましては、当事業団(電話：0250 - 25 - 3981)までお問い合わせください。



道端遺跡



下沖北遺跡

下割遺跡



仲田遺跡



浦廻遺跡



## 報告書作成中の遺跡

### あかさかやまちゅうせいいかまあと 赤坂山中世窯跡

遺跡は北蒲原郡安田町大字六野瀬字赤坂山に所在し、平成3年、磐越自動車道建設に伴い発掘調査されたものです。鎌倉時代後半、13世紀半ば頃の陶器窯跡が2基と炭を焼成した木炭窯跡が1基発見されました。陶器窯は瓷器系と呼ばれる常滑焼の技術を導入したものです。2基の窯は18mと20mを超える長大なもので、地中をトンネル状に掘り抜いた地下式と呼ばれる形をしています。特徴として、燃烧室と陶器を焼いた焼成室の境に分焰柱という柱を持っています。この窯では甕・壺・鉢・盤の4種類の陶器が主に焼かれていました。赤坂山中世窯跡では、特に大きめの壺が大量に焼かれていたことがわかりました。この時代は甕・壺・鉢が、貯蔵具・調理具として大きな役割を持っていました。

鎌倉時代の越後には、石川県能登半島で焼かれた珠洲焼の甕・壺・播鉢が大量に入ってきていましたが、越後でも五頭山麓の笹神丘陵のみでこうした陶器が焼かれていたのです。甕や大きめの壺の外面には押印と呼ばれるスタンプ文が何段も押されています。この押印や陶器の作り方をみると、常滑焼だけではなく珠洲焼や石川県小松市の加賀焼、笹神丘陵のほかの窯跡などの影響も受けて作られていることがわかりました。



完掘状況



出土遺物

### ほりむかいがわらかまあと 堀向瓦窯跡

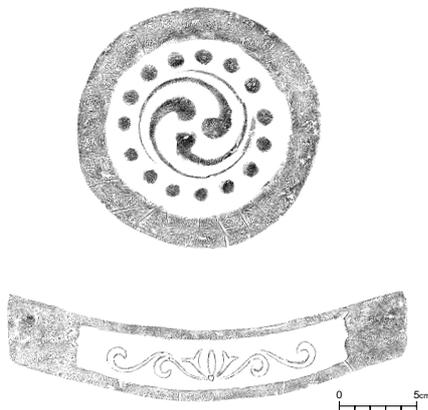
遺跡は上越市大字黒田字堀向に所在し、平成8年に上信越自動車道の建設に伴って発掘調査が行われました。瓦を焼成した登窯跡2基と、窯と関係する土坑、焼き損じの瓦を捨てた瓦捨場などが発見されました。時期は江戸時代で瓦は高田城に使われたことがわかっています。平瓦・軒平瓦・丸瓦・軒丸瓦・面戸瓦などが主に焼成されていました。軒平瓦と軒丸瓦の割合が非常に高いため、高田城の修復に関係したものだった可能性があります。

ほかに陶器も少量焼かれていたようです。瓦は赤瓦

と呼ばれる釉のかかった赤褐色のものです。軒丸瓦の瓦当には三つ巴文が、軒平瓦の瓦当には唐草文がスタンプされています。窯の形は連房式登窯と呼ばれるもので、丘陵の傾斜に沿って粘土で階段状に室を築き、下室から上室に順に焼き上げていくものです。2号窯は長さ14.9m、幅1.9mの大規模なものです。この窯は燃烧室と9個の焼成室に分かれていました。平瓦は何枚か重ねて置かれ焼成されたようです。そのため、溶着した平瓦がたくさん捨てられていました。

今後は、高田城の発掘調査成果や文献資料も合わせ、年代や工人の系譜などを検討していきます。

(小田由美子)



軒丸瓦・軒平瓦



2号窯完掘状況

連載企画・にいがたの文字資料から

第3回 - 墨書土器 -

これまで木簡や漆紙文書など文章となった文字を取上げてきました。文章を作る特定の階層による文字ではなく、今回は一般の人々が身近な生活具の土器に書いた文字について記したいと思います。

文字の書かれた土器のことを墨書土器といいます。役所名や官職名の他に人名を記したもの、人の顔を描き病気など自分の中の悪いものを土器に移して流そうとするものまで多彩な内容です。しかし大半の墨書土器は漢字一文字だけが記され、その中に則天文字という特徴的な文字が書かれたものがあります。

則天文字とは、中国史上唯一の女帝・則天武后が西暦690年頃に創出・制定した17文字をいいます(図 参照)。武後の在職中はこの文字の使用が強制され、そのためか中国ではわずか十五年余りしか使われず、むしろ、同時に伝わった周辺諸国で残ってゆきました。時代劇でおなじみの水戸黄門こと徳川光圀が「国」に代って使っているのがその一例です。遣唐使が持ち帰ったこの文字を、異国風の変った字体に興味を示した中央の役人等が使い始めます。それが地方役人から庶民に伝わったり、近隣に住む大陸からの移住者が使っているのを見た人達が次第に学び普及したとされています。移住者が多い関東・東北・中部で多く出土するのは、そのためと思われます。

県内では荒川町鴨侍遺跡から「厶」1点と亀田町牛道遺跡から天を意味する「厶」18点が出土しています(写真 )。牛道遺跡と似た字体が会津若松市上吉田遺跡からも出土しています(図 )。牛道遺跡では会津若松付近で作られた土器が、上吉田遺跡では北陸地方の土器が出土し、阿賀野川を經由した交流が見られます。字体が似ているので上吉田遺跡から学んだのかもしれませんが、ただ、上吉田遺跡では「善」の墨書土器が圧倒的に多く、「厶」は1点しかありません。ここでは普通の「天」も書かれているのに、「厶」の方を真似ているのは、則天文字を意味や音のある漢字として受け入れたのではなく、その特異な形などに注目したようです。特に「厶」だけを牛道遺跡で多くの土器に墨書しているということは、特殊なマークか記号のようなものとして使っていると考えられます。それは家ごとに家紋があるように、家族や同じグループの共通標識として土器に書かれたと思われます。

約1,500年前に日本人が漢字を使い始めた頃は、豪族などしか使えず、権威権力の象徴として神聖なものでした。それが約500年後の牛道遺跡の墨書土器では庶民も漢字を使っています。しかしそれは文字としての漢字ではなく、近親者の間の記号・マークか、神秘性に由来する祭祀の特別な道具として用いられたようです。この後次第に慣れ親しみ、生活の上でも必要となって庶民が漢字を文字としてとらえるようになり、文字の「読み書き」と「算盤」が寺子屋などで教えられるのです。

則天文字はそれぞれ意味をもって作られています。「囗」は国境を四角い「口(国構え)」で表し、その中の四方八方を意味して「八方」を中に書き国を表現しています。人の人生は一生でありそれ故「一生」を縦に並べて「厶」が人となり、土地は山と水と土で作られているので合わせて「壘」という具合です。武后を真似て自分だけの文字を作ってみるのもおもしろいかもしれません。

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	則天文字
至	囗	壘	盤	稔	缶	宰	廩	蕙	思	厥	○	◎	◎	壘	厶	壘	
人 國 聖 證 授 正 年 初 載 臣 君 星 月 日 地 天 照																	
構成、その他																	
日月空の合字 古文 山水土の合字 乙(鳥形)と日輪 卍と月輪(前期型)と出後期型 象形 厶(天)と大吉の合字 一忠の合字 土人車の合字 厶(天)明(卍)人土の合字 千万の合字 古文 禾久几(天)王の合字 永主久王の合字 長舌(卍)主の合字 口八方の合字 一生の合字																	

図 : 則天文字一覧表

出典：蔵中進「則天文字 女帝の権力が生んだ十七字」

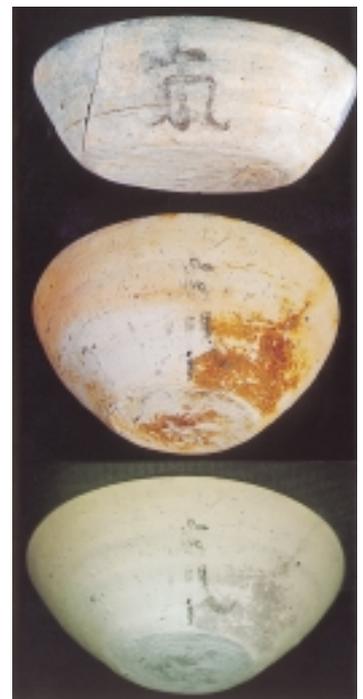


写真 : 墨書土器(牛道遺跡)



図 : 則天文字墨書土器 (福島県会津若松市上吉田遺跡) 出典:「福島県文化財調査報告書第241集」

## 埋文コラム「発掘から見えてきた発火具の歴史」

### ひきりいた ひきりぼう 火鑽板・火鑽棒

日本の遺跡出土の発火具で、最古のものは弥生時代中期出土の火鑽板といわれています。火鑽板は、火鑽棒と組で木と木をこすり合わせ、摩擦によって火を起こす道具です。火鑽棒をどのように回転させるかにより「キリモミ式」「ヒモギリ式」「弓ギリ式」「舞ギリ式」と、分類することができます。しかし、出土遺物の中ではっきり摩擦式発火具といえるものは、現在のところ火鑽板と火鑽棒のみで、この組み合わせの発火法の「キリモミ式」発火法が古代以来行なわれていたと考えられています。また、発火材料としては、現在はヒノキ（火の木）がよいとされていますが、樹種同定した結果、スギが多く使用されており、身近な材を選択的に利用していた様子がうかがえます。上越市一之口遺跡東地区（古墳・平安）からは、平安時代のスギ材の火鑽板と火鑽棒が十数点出土しています。火鑽板には火鑽棒の足がかりとなる浅い窪みが作っており、また、摩擦で生じる黒い粉（火種）をためるために板側辺にV字の刻みをつけています。使用した臼の部分には写真のように黒く炭化しています。火鑽棒は握りやすいように丸みをもたせ削ってあり、先端の火鑽部分が丸く光沢を帯びたものや、使用により丸く摩滅し炭化しているものもあります。また、白根市浦廻遺跡（中世）からは、下駄の歯を転用した火鑽板が出土しています。このように無駄のない生活は私達への教訓となります。



上2点：火鑽板 下2点：火鑽棒  
（一之口遺跡東地区）



下駄の歯を転用した火鑽板（浦廻遺跡）

### ひうちがね 火打金

火花式発火法として、鉄製の火打金と火打石を打撃、または擦るといった方法で発火を行ないます。現在、火花式発火法で確認されている最古の火打金は、古墳時代後期といわれています。キリモミ式発火法の衰退に伴い火花式発火法が発展し、平安時代にはその出土量の増加からも実用的使用の普及がうかがわれます。その形もさまざまで、時代によって好まれた形があるようです。妙高高原町関川谷内遺跡（縄文・平安）からは、古代の火打金が出土しています。山型とよばれる形状をなしており、両端が丸く反りあがっています。新井市旧得法寺跡（縄文・中世・近世）から、中世（室町）の火打金が出土しています。錆に覆われていますが、頂点に径3mm程の小孔が穿たれています。ヒモでも通していただのでしょうか。2遺跡とも残念ながら火打石は出土していません。



火打金の使用方法



火打金：上（旧得法寺跡）

下（関川谷内遺跡）

（今野明子）

## 県内の遺跡・遺物 39

## こせがさわどうくつ 小瀬ヶ沢洞窟出土品 (平成12年 国指定)

遺跡所在地：東蒲原郡上川村大字神谷字善入山

小瀬ヶ沢洞窟は、阿賀野川に流れ込む常浪川の支流にあたる室谷川の上流に位置し、標高は約200mです。洞窟の規模は、入口部分の幅が1.5m、奥行7mで、洞窟前には約80㎡のテラス状の傾斜地をもっています。調査目的は、県内尖頭器文化の究明で、長岡市立科学博物館が昭和33年と昭和34年の2回に分けて調査しました。調査面積は約60㎡で、遺構としては焚火跡とみられる焼土が数ヶ所で確認されました。上層からはごく少数の縄文時代早期・前期の土器片が出土しましたが、大半は縄文時代草創期の遺物であり、細片の土器と多量の石器類、そしてわずかな骨器が発見されました。具体的な出土点数は土器片1,394点、石器・石製品11,474点、骨器・獣骨241点ですが、その中の縄文時代草創期を代表する土器片140点、石器・石製品1,207点、骨器3点の合計1,350点が、平成12年に国の指定（重要文化財）を受けました。

出土した草創期の土器は表面を飾る文様が多彩で、当該期の特徴をよく示しており、石器についても旧石器時代と縄文時代の要素を持ち合せ、時代や暮らしの推移をよく示しています。このように、日本列島における土器出現期の様相を如実に示す資料として、さらに北東アジア地域のこの時期の動向を知る資料としても極めて貴重なものということで重要文化財に指定されました。



出土した様々な石器類 (写真提供 長岡市立科学博物館)

### 埋文にいがたNo.41

発行 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新津市金津93番地1 e-mail: maibun@coral.ocn.ne.jp

TEL (0250) 25-3981 FAX (0250) 25-3986

印刷 新高速印刷(株)